



しまね学習支援プログラム「地域魅力化プログラム」を活用したみなさんの様子をお伝えします。



「笑顔をゴールに 学びをデザイン」

奥出雲町教育委員会 地域コーディネーター

平井 千夏 さん

当センター主催の「ファシリテーター養成講座」を受講された平井さん。学校・地域・若者をつなぐコーディネーターとして各地で活動を続けています。中学校や高校・専門学校での学習支援、NPOやコミュニティ財団での地域活動、ケーブルテレビでの情報発信など、さまざまな立場から“一人ひとりの声を引き出す場づくり”に取り組んでいます。今回は、研修での学びや実践の工夫についてお話を聞いてきました。

Q：研修で学んだことや、今の実践に生きていることは何ですか？

平井さん 一番印象に残っているのは「準備が8割、本番が2割」という言葉です。「まずはやってみる」を大事にしていて、以前はその場の雰囲気で進めることも多かったです。今はそれも大切にしつつ、「何のためにこの時間につくるのか」「どんな気持ちになって帰ってほしいか」を明確にし、丁寧に準備を行うようになりました。

チームで会議やイベント運営をする機会も増えたため、進行台本の読み合わせや、円滑に引き継ぎを行う意味でも、文字として準備を記録することを心がけています。また、可能な限り、本番を想定した打合せの時間もとるようにしています。

また、研修で実際にプログラムを作成し、ファシリテートするなかで、「問い合わせ」と「場づくり」の重要性に気づきました。想いやアイデアを参加者自身の言葉で話してもらうために、問い合わせの方や発言しやすい流れを設計することを大切にしています。



【高校生対象探究イベント打ち合わせの様子】

Q：プログラムづくりで意識していることは？

平井さん 必ず最初に目的とゴール、特に「参加者にどうなってほしいか」を考えます。そのねらいに沿って、活動内容や順番、アイスブレイクを決めていきます。以前はアイスブレイクも“とりあえず盛り上げるもの”でしたが、今は男女比や、初めて来られる方の有無など、参加者の属性を確認し、メインの活動につながるよう組み立てています。

Q：場づくりで工夫していることはありますか？

平井さん 座席を円形にして顔が見える配置にしたり、BGMを流したりします。高齢者の方が多い時は出雲弁で話したり、どんな意見も否定しない声かけをしたり。そして何より、自分がしゃべりすぎないことを意識しています。

Q：専門学校では、どんな学習プログラムを実施していますか？

平井さん 地域で働く方を講師に招き、インタビューやフィールドワークを通して仕事や思いにふれたうえで、「その方を笑顔にするために自分たちに何ができるか」を考える探究型の授業を行いました。どうすれば自分ごととして考えられるかを大切にして、この問いは何度も吟味しました。また、留学生も在籍しているため、説明の言葉や進め方にも配慮し、誰もが安心して参加できる環境づくりを心がけました。最終回では、学生たちの「やりたいこと」と「できること」を生かした発表が行われ、講師の方にも喜んでいただけました。

Q：これから取り組んでみたいことを教えてください。

平井さん これからも、一緒に考え伴走する人でありたいと思っています。生徒や地域の方と話していると、まだまだ自分にできることがあると感じています。ファシリテーター養成講座は、派遣社会教育主事さんに声をかけていただいたことがきっかけで参加しました。研修を通じて、ファシリテーションに関する知見を深めただけでなく、社会教育の世界と出会うことができました。今後は、社会教育について学びを深め、現場での取り組みに生かしていきたいと考えています。

平井さんの実践は、特別な手法ではなく、「丁寧な準備」と「参加者を信じて任せる姿勢」の積み重ねから生まれています。研修での学びを土台に、学校と地域を結び、主体性を引き出すコーディネーターとして、各地でその輪を広げています。次ページでは、平井さんが実践した専門学校での資料を掲載しています。ぜひご覧ください。